

共同研究プロジェクト「組織行動の基礎的研究」

〈中間報告〉

プロジェクト責任者 照屋行雄

我々の今までの研究会は、成員の月々の報告を当番制にして、当番に当たった報告者が自身の研究テーマに沿いながらも構成員にも有益となるテキストを選び、それを全員が読んできて議論するという形式を取って進めてきた。しかし、2017年度から最終の次年度にかけては、個々人が継続的に進めてきた研究課題について、その中間報告という形で報告し、成員からの批評を受け、それを参考に更に精度を練り上げるという方法で研究を進めている。その結果、2017年度前期においては4回の研究会がもたれ、3つの研究報告が行われた。以下その報告内容の概要を示すことで研究会活動の中間報告としたい。

最初に、後藤研究員の報告について。報告内容は、「ホップズの人格論」についてである。この研究は現在の会社組織を考える上でホップズの人格論から示唆される点が多々あるということからおこなわれたものである。後藤はホップズがその著作『リヴァイアサン』において、コモンウェルス即ち国家を定義して「一つの人格」としていることの意味を取り上げて論じた。

ホップズは、人格を人間の言葉や行為の帰属先と捉え、その言葉や行為が自分自身のものであれば「自然的人格」として、また他人の言葉や行為あるいは他のものを代表する場合は「仮構的人格」ないし「人為的人格」とした。後者の仮構的または人為的人格は他人を真実に代表する場合もあれば、他のものを「擬制的に」代表する場合もある。コモンウェルスあるいは国家は、群衆相互の信約によって形成される擬制的人格であり、それを代表者（主権者）が担うことになる。この擬制的なるものの存在とその代表者の関係は、国家の

みならず、組織一般についても適用できる構造をもっており、今日的な会社組織の行動と責任の所在の考察についても多くの手がかりをもたらすと報告は述べている。以上、ホップズの人格論は、会社は誰のものかから始まって企業行動の社会的責任論の問題解明への手がかりをも与え、揺らぎ始めた「物づくり日本」の信頼の維持と創造にとっての緊急な課題解明への手がかりともなると思われる。

次に、吉田研究員の報告について。吉田は自らスイスのチューリヒに赴き、現地の歴史的事実を今日に伝える史料をその地の図書館に通って集め、今まで読んできた資料とそれら史料を重ね合わせることで、「信仰の亡命者」の行動を跡付ける報告を行った。信仰の亡命者の問題で吉田が関心をもつ問題は、著名なマックス・ヴェーバーがその著、『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』において「あまり論じられていない諸地域」における信仰と社会層の関連、「あるいは禁欲的職業労働理念と教義の繋がり」を検証することであった。

スイスへ移住した亡命者は、イギリス、フランス、イタリアからの新教徒が主な源泉と言われている。研究会の報告では、イタリアのロカルノの亡命者を対象としている。ロカルノ人の来住によってチューリヒの人口は、当時、8000～9000人も増加したといわれ、16世紀以降の経済的躍進の原動力となった。亡命当初のチューリヒの社会的状態は古い仕来り（ツunft）の中に在って、ロカルノ人による現地への新しい技術の導入はさまざまな抵抗にあわざるを得なかった。その抵抗と市政への参入の努力が代表的な家族の活動を通して述べられている。この種の問題は難民移住者の地域社会への出入りに関わる問題として、今日ますます注目されるべき問題であると思われる。

最後に、萩原研究員の報告について。二宮金次郎の「徳と誠」の概念は、朱子学の教えを単に受け入れた知識ではなく、金次郎が幼少以来の自然界の営みとの格闘の中で自得した自然から教えられた事実性を見極めるという「誠」であり、その上での行為の選択とその実践の中に「徳」がありそれが善であった。また、金次郎の「村の為になる」という思想の根底には常に「五常」と「五輪」の理解と実践の方向があり、そこには物事が生成するという考えがある。そこで、江戸時代の「宋学」の儒者による受容の在り様がどのようなものであった

かを知る必要があると考え、その報告を今年度は行った。

この報告では、一般に言われてきた朱子学には発展の可能性は考えられないという儒教の理解にどこか誤りがあるのではないか、との疑問を確認することであった。現在の儒教研究の成果は、東洋的停滞などと言われていた研究内容が一新されて、古学の研究が実際に生ある人間を対象にどのように行われたのか、貝原益軒にあっても、伊藤仁斎にあっても、荻生徂徠にあっても、懐徳堂の儒者達にあっても、そこには常に「人間如何に生きるべきなのであるか」の問題があった、と思われる。江戸の儒者達も自らを取り囲む歴史的現実と真摯に向き合い、そこを超えて「生」や「自らと社会との問題」を考えていたことは多くの文献が語っている。

以上、本年度前半に行われたおもな研究発表の概要を紹介してきた。我々の研究会では、次年度末のまとめに向かって、これまで通り、研究会の頻繁な開催と濃密な議論の展開を維持し、成員自らの課題の創造的発展を図っていきたいと考えている。

文責 萩原富夫